

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03265

研究課題名(和文)「熱狂(ファナティズム)」の克服 近代英仏政治思想における情念の政治学

研究課題名(英文) A way to overcome fanaticism: passion in modern French and British history of political thought

研究代表者

川出 良枝 (Kawade, Yoshie)

東京大学・大学院法学政治学研究科(法学部)・教授

研究者番号：10265481

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：宗教的・イデオロギー的「熱狂(ファナティズム)」、国民・民族間の敵対感情の暴発、熾烈な党派争いは、戦争や内戦や圧政など政治秩序の危機的状況をまねく可能性を秘める。こうした市民や国民の暴力的情念をどう理解し、どう克服するかは、政治学が対処すべき問題の一つである。本研究は近代英仏政治思想において、「熱狂」という問題がどのように論じられ、その克服のためいかなる処方箋が示されてきたかを、モンテスキュー、ヒューム、スタール(スタール夫人)の政治思想の分析によって明らかにする。

研究成果の概要(英文)：Religious or ideological fanaticism, antagonism among different nations, nationalities and peoples and ferocious conflicts among factions may lead to foreign or civil war and cause a fatal crisis of political order. Politics must deal with how these serious problems that violent passions provoke are resolved. My project aims to clarify the arguments regarding fanaticism and violent passions in modern French and British history of political thought, by analyzing the ideas of Montesquieu, David Hume, Voltaire, Benjamin Constant and Madame Stael, who explored a way to overcome fanaticism in the Age of Enlightenment, Revolution, and post- Revolution.

研究分野：西洋政治思想史

キーワード：政治思想 モンテスキュー ヒューム スタール コンスタン 情念

### 1. 研究開始当初の背景

17世紀イギリスの内乱(ピューリタン革命)の経験を通して、トマス・ホブズは、狂信やエリート層の飽くなき権力欲・栄誉欲が秩序を崩壊させる危険な情念であると断定した。その後の近代社会は、ハーシュマンの古典的名著『情念と利害関心(インタレスト)』(The Passions and Interests, 1977, 邦訳題名『情念の政治経済学』)が明らかにしたように、情念を情念で制御する、とりわけ権力欲や栄誉欲や宗教的熱狂を金銭欲(経済的利害関心)で制御するという画期的な方向を生み出すことになった。この「情念と利害関心」図式はきわめて魅力的であり、その妥当性を認めるにやぶさかではないが、他面で、暴力的な情念や狂信は形を変えてアンシャン・レジームやフランス革命、またポスト革命期において暴発したことも事実である。冷静な損得勘定が必ずしも宗教的・イデオロギー的熱狂をコントロールできないという結果がもたらされたのである。

本研究は、そうした観点から、初期近代の英仏の政治思想において、「熱狂」という問題がどのように継続的に論じられたかを明らかにしようと考え、研究課題を設定するに至った。

### 2. 研究の目的

市民や国民の暴力的情念をどう理解し、どう克服するかは、政治学が対処すべき問題の一つである。本研究は近代英仏政治思想において、「熱狂」という問題がどのように論じられ、その克服のためいかなる処方箋が示されてきたかを、モンテスキュー、デイヴィッド・ヒューム、スタール(スタール夫人)の政治思想の分析によって明らかにする。

本研究でとりあげる3名の思想家は、絶対王政の専制統治(モンテスキュー)、イングランド革命後の国民の亀裂(ヒューム)、フランス革命後のテロル(スタール)と、自ら大きな歴史的課題を背負いつつ、こうした情念の複雑な位相に精緻な理論を展開した。3名の思想を中心的分析対象としつつ、比較のため、ヴォルテール、バンジャマン・コンスタン、パークやジャン＝ジャック・ルソーなどを視野に入れ、情念の政治学とも呼び得る彼らの情念論を解明することをめざす。

### 3. 研究の方法

古典的テキストのみならず、18世紀から19世紀当時に刊行された多様な書籍・雑誌・パンフレットを対象に研究を進める。主要な思想家については、草稿研究もおこなう。

研究対象については、以下のような方法論のもとで研究を進めた。

第1に、上述の問題を考える上であらためてモンテスキューの思想のもつ意味を再考

した。第2に、これまで申請者が主として専門としてきたフランス18世紀の政治思想研究を拡大し、18世紀のブリテンの思想、および英仏の知的交流に焦点をあてた。第3に、分析をフランス革命期、および、ナポレオン帝政期にまで延長し、宗教的熱狂にかわるイデオロギー上の熱狂、あるいは愛国主義やナショナリズムがもたらす熱狂の問題にまで分析を発展させた。

### 4. 研究成果

(1) H27年度は、研究の初年度であるため、政治と情念という全体の理論的骨組みを確固なものにする作業からはじめた。ハーシュマンによる「情念と利害関心」テーゼの再検討をおこない、申請者がこれまでモンテスキューとルソーについて論じてきた「名誉」や「徳」の概念を批判的に再検討する作業をふまえて、情念を利害関心に置き換える戦略がどういう点に強みを発揮し、どういう点で弱点をもつのかについて見取り図を描いた。ホブズやカンバーランドをはじめとする自然法論の重要性を確認し、相互的仁愛の観念がハーシュマン図式の延長線上に位置づけられることを解明した(成果の一部は論文として刊行済)。宗教的熱狂に対する批判は、人間の理性能力の再吟味をもたらし、その際、既存の理性観念とは異なる新しい理性観が登場したことについて、あらためて認識を深めた。

当時、fanatic, fanaticism や violent passions と呼ばれた概念の意味内容を歴史的文脈に即して確定する作業をおこなった。また、当該年度はケンブリッジ大学において集中的に研究する機会を得たため、積極的に同大学の教員、および同大学が開催するセミナーやシンポジウムに参加した英国・ヨーロッパの研究者との交流をおこなった。

(2) H28年度は、引き続きケンブリッジ大学に滞在しつつ、申請者にとってはじめて取り組む対象であるヒュームに着手した。ヒュームの哲学的情念論(A Treatise of Human Nature, An Enquiry Concerning the Principles of Morals, A Dissertation of the Passions)の分析に専念した。特にその暴力的情念(violent passions)と「温和な情念(calm passions)」の性質および原因についての議論の解明を行った。こうした哲学的前提と関連づける形でヒュームの情念論を考察した上で、彼がイングランド政治における党派対立や、それと密接に関連する対フランス外交のあり方について、どういう立場をとったかについて、その時局的な論考の分析により明らかにする作業を進めた。

ついで、フランスについては、まず、モンテスキューの政治論をそのmodérationという観念に再度スポットライトをあてることで分析した。また、その際、モンテスキューの宗教に対する見解、とりわけ、宗教と専制

との関係について、『ペルシア人の手紙』のみならず、『法の精神』第 24-25 篇のもつ重要な意義を解明した。スタールについて、特にその革命観について、コンスタンとの違いを析出した。スタールの『革命を収束させる現下の情勢』の重要性に着目し、フランス革命におけるテロルについての解釈の多様性を追跡し、フランス革命をめぐる諸思想について論文を執筆するための準備が整った。また、ナポレオンを批判する際のスタールの論拠が、テロルを批判する際の論拠と異なることも明らかになった。

スタール夫人について、Biancamaria Fontana 氏と工藤庸子氏があいついで単著を刊行された。ローザンヌ大学に所属する Fontana 氏とはケンブリッジ滞在中に知己を得、その後もメールを通して議論した。工藤氏の著作についてはフランス政治思想研究会の場で合評会が催され、そこで合評者の一人として報告した(2017年1月20日)。二つのモノグラフィは、本科研費の成果として今後刊行予定の単著にとって、きわめて重要な意味をもち、それらを元にしつつも、それをより批判的に発展させるための研究計画を再構築した。Fontana 氏と工藤氏と議論し、再構築した研究計画の方向性が独自であり、生産的なものだという評価を得た。

(3) H29 年度は、前年度までの研究成果をくみこみ、穏健・節度 (moderation) という鍵概念を導きの糸として、熱狂 (ファナティズム) の克服のための条件を探るという研究全体を総括することができた。しばしば用いられる「穏健な・穏健派」(moderate(s)) という概念こそが、人間の情念のコントロールという観点から再評価されるべきものであり、モンテスキュー、ヒューム、スタールに共通する政治理念であることが明らかにされ、その積極的な特質と意義とを再定義した。

本研究を企画した段階では、ジョナサン・イスラエルのいわゆる啓蒙三部作と呼ばれる論争的な仕事についてはまったく考慮していなかったが、研究を進めるにつれ、はからずも、本研究がイスラエルの図式に対するアンチテーゼとなったことがわかった。すなわち、イスラエルは、啓蒙思想を「急進的啓蒙 (radical Enlightenment)」(スピノザ、ベール、ディドロ、ドルバック、ペインなど) と「穏健な啓蒙 (moderate Enlightenment)」(ロック、モンテスキュー、ヒューム、ルソーなど) の二つの陣営に分け、前者の意義を強調し、後者を否定的に捉える。こうした二分法に対し、moderation という観念が、単なるグループ分けのための名称にとどまらない積極的な思想的意義をもつことを理論的に示し得たことは、本研究の大きな成果の一つと考える。

(4) 三年間をふりかえり、具体的な成果について、期間内で論文の形で刊行できなかったものも含めて箇条書きで示す。

当研究プロジェクトの根幹的成果として、ヒュームの「熱狂」批判や党派批判について、論文や学会報告の形で世に問うことができた。ヒュームとその『政治論集』の仏訳者ル・ブランが、7 年戦争勃発にいたる過程で噴出した両国の国民の敵対感情にいかに対処するかについて苦闘した過程を分析した論文を執筆し、刊行した (Yoshie Kawade, "Peace through Commerce or Jealousy of Commerce? Jean-Bernard Le Blanc on Great Britain in the mid-18th Century")。この論文については、ケンブリッジ大学で共同研究をおこなった政治思想史の研究者や、国内のヒューム研究者から、世界的に見てオリジナルな研究であると高く評価された。その成果の一端は日本政治学会などでも報告した。あわせて、ヒュームの党派論について小論を刊行した。

スタール夫人については、その革命論にあらわれる moderation の概念を元に、モンテスキューとの連続性を強調する形で理解が進んだ。その一方で、スタール夫人の愛人であり、また共同執筆者でもあり、やがてナポレオン評価をめくり、袂を分かつことになったコンスタンについては、当初、独立して分析する予定はなかった。ところが、コンスタンの総裁政府期の時局的論文その他の重要性が判明し、スタール夫人とは別に、コンスタン研究の必要性を痛感した。コンスタンの重要性を発見したのが H29 年度になってからであり、もう少し時間をかける必要が発生したため、今しばらく研究を続けた上で、すでに分析の骨幹が固まったスタール夫人論とともに論文として刊行予定である。

モンテスキュー、ヴォルテール、ヒュームなど、本プロジェクトで重要な役割を果たす論者について、批判的な評価を下すことで学界に波紋を投じているジョナサン・イスラエルの「急進的啓蒙」対「穏健な啓蒙」という二分法を軸とした啓蒙研究に本格的にとりくみ、この図式の問題点を考察する論考を完成した (印刷中)。

こうした成果によって、宗教的・イデオロギー的熱狂、排外主義、暴力を伴う不寛容といった極端な感情の暴発に対し、政治がいかに対処すべきかについて考察するための理論的・思想的枠組みを提供することができた。最終的には、関連する論文を一つにまとめ、著書として刊行することを予定している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

川出良枝 「ジョナサン・イスラエル、森村敏己訳『精神の革命 急進的啓蒙と近代民主主義の知的起源』書評」『社会思想史研究』査読無、第42号、印刷中

( )

研究者番号 :

川出良枝 「党派対立とデモクラシー」『学際』、査読無、3号、2017、p. 113-118

(3) 連携研究者

( )

研究者番号 :

Yoshie Kawade, "Le retour à la nature: la réception de Jean-Jacques Rousseau au Japon après la Seconde Guerre Mondiale", 『日仏文化 (Nichifutsu Bunka)』、査読無、84号、2015 p.228-233.

(4) 研究協力者

( )

〔学会発表〕(計 3件)

川出良枝 「海洋帝国の勃興: モンテスキュー後のイングランド論」日本政治学会、2017年

川出良枝 「工藤庸子著『評伝 スタール夫人と近代ヨーロッパ』をめぐって」近代フランス政治思想研究会、2017年

川出良枝 「『穏和な商業』か『貿易の嫉妬』か ジャン=ベルナール・ル・ブランとヒューム」近代思想研究会、2017年

〔図書〕(計 3件)

Yoshie Kawade, "Peace through Commerce or Jealousy of Commerce? Jean-Bernard Le Blanc on Great Britain in the mid-18th Century," in The Foundations of Political Economy and Social Reform, Ryuzo Kuroki & Yusuke Ando (eds), Routledge, 2018, p. 24-44 (総頁 210)

Yoshie Kawade, "Montesquieu", in Western Political Thinkers from Socrates to the present, David Boucher and Paul Kelly (eds.), 3rd edition, Oxford: Oxford University Press, 2017, p. 268-285(総頁 668)

川出良枝 「平和なる共生のための政治哲学に向けて 初期近代における相互的仁愛論の可能性」『内在と超越の闕 加藤信朗米寿記念哲学論文集』(土橋茂樹・納富信留・栗原裕次・金澤修編 (知泉書館, 2015, p. 229-241 総頁 289)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

川出 良枝 (Kawade, Yoshie)

東京大学・大学院法学政治学研究科・教授  
研究者番号: 10265481

### (2) 研究分担者